ねぎぼうず新聞 vol.03

女性村

2022 Autumn

フジコ・ヘミングさんのピアノをお迎えして

フジコの部屋でカメラマン中嶌英雄氏のフジコ・ヘミング写真展が開催されます。

【日　時】 11月13日(日)
【開　演】 13時
【場　所】 群馬県下仁田旧西牧小学校跡
フジコ・ヘミングの部屋
【入場無料】 先着30人
【申　込】 NPO法人日本ららばい協会
TEL 03-6458-0283 ／ FAX 03-6458-0284
Eメール：info@komoriuta.jp

【プログラム】
シューマン：トロイメライ
ベートーヴェン～リスト編曲ピアノ版：交響曲第6番「田園」より
クライスラー：愛の喜び
サラサーテ：チゴイネルワイゼン　ほか

【プロフィール】

後藤　泉　*Izumi Goto*　ピアノ

桐朋学園大学ピアノ科卒業、アンサンブル・ディプロマコース修了。ウィーン・フィル首席奏者と多数共演するほか、ベートーヴェンのピアノソナタ及び交響曲（リスト編ピアノ版）をライフワークとし、音楽の魅力を広く分かち合いたいと活動を続けている。
https://www.izumigoto.com/

平澤　仁　*Jin Hirasawa*　ヴァイオリン

5歳よりヴァイオリンを始め、1981年東京芸術大学音楽学部に入学。1985年第54回日本音楽コンクールに入選。1986年ジュリアード音楽院に留学。1988年東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターに就任。2009年よりその経験を生かした客演、ソロ活動に専念。
http://j-musik.com/jinvn/

みどりの森に眠っていた旧西牧小学校校舎にやってきたフジコ・ヘミングさんが子どものころから弾いていたピアノ。長い歴史が偲ばれるピアノは私より価値があるかも、と笑いながら話されていたフジコさん。
このピアノとヴァイオリンによる最初のコンサートが開催されます。

撮影：中嶌英雄

下仁田の紅葉。11月中旬は紅葉が見頃です。　撮影：浅野健

report

フジコヘミングさんのピアノの解体と調律

「ピアニストが愛用のピアノを寄贈して下さる、命を下さるようなもの」と誰かが言いました。

「子どもの時から、音に親しむ、たいせつよね」とフジコさんはおっしゃいます。

そのピアノは下仁田の西牧小学校の一階の教室に運ばれオープンを前に、それは名調律師の矢高豊和さんの手により、解体修理をしていただきました。

「なんと丁寧に使われていたのでしょうか」矢高さんの第一声です。

譜面台は手掘り、キーは象牙です。何度か修理の跡は見えますが、音楽家の歴史と優しさが感じられ、修理調律もなんと七時間余りの時間をかけて行われました。

矢高さんの仕事を見つめる理事長

鍵盤は象牙、譜面台は手彫りという貴重なピアノ

静かな緑のかぜがふく晩夏の空に一音ずつがこだましていました。

このピアノで演奏をということで11月3日(日)にヴァイオリンとのジョイントコンサートが行われます。

ミャンマー協会視察

今は、戦火のウクライナ一色ということになっていますが、ちょっと前はミャンマーの政変で大騒ぎでした。民主政権は倒れ、スーチー女史は捕らえられ、軍需政権の中で、国民は大きな変化の中で苦しんでいます。

日本にいるミャンマーの方たちも、ウクライナの国民のように祖国からくることもまた、行くこともできていません。

昔のビルマは日本とはとても親密であり、ビルマは農業国、どこかにミャンマーの女性たちの拠点が作れないだろうか、と下仁田女性村まで視察にいらっしゃいました。

この先、どんな計画ができ、又実現できるか楽しみにしていてください。

地元発

泣いて笑って豚ホルモン

まち映画　ロケ地 下仁田本宿

ひょっとして　あなたが主人公
役を演じるのではなく
あなたの生活が
あなたの姿が
あなたの人生が
住んで暮らしいるまちの中で、
ドラマを創っていきます
ヒーローもヒロインも
あなた自身
名プレイヤーのわき役は
ほら、知り合いや
お隣さんです

今この瞬間、私達は愛しい小さなドラマの中できっと優しさに包まれることでしょう。

まち映画、本当の生きたドラマは自然の中に私たちの隣に眠っているのです。静かに、いとおしく。

「豚ホルモン」は下仁田旧西牧小学校「ねぎぼうず」にて上演いたします。地元の皆さま企画、出演、しています。

お問い合わせは日本ららばい協会まで
03-6458-0283

欣也ワールド全開!!

世に好きなことでたべられるようになった人はほんの一握り。好きなこと一筋に、と覚悟して没頭すれば変人のそしりはまのがれず、成功すれば天才、奇人と呼ばれても、そうなる人もまたほんの一握り。しかし、何かの共通点はあるのでは。

とにかく努力家、誰の見返りも期待せず、ペースをおとさず日々努力、多田欣也、きんちゃんもその一人ということになる。

私が遠野市の文化顧問をしている時、市の主催する遠野文化賞に応募してきて、その受賞が多田欣也氏に決定したのが最初の出会いだった。

授賞式にアロハで出席したのに度肝を抜いたが、いでたち通り、アウトロー、世の常識をはるかに超えてしまうエネルギーと執念の持ち主だった彼はその作業の書くことのすべてをスタバで創作する。コーヒーを飲みながら文を書き、絵をかき、また家では細かな実に細密繊細なものを制作する。

休みは独特な絵に飾られた自家用車で、海や山へと出かけ、ほとんどの人が見向きもしない。

物に手を出し、心を出し、労力を出して、何らかの作品にしてしまう。相棒が奥さんというのも何にかユーモラス。奥様サンデーと名付けて、どう説得したかしれないが、愛車を駆って自由奔放、日本中の道の駅をホテル替わりとし、車に眠り、独特創作活動に精出している。

変わっていると言えばそれまでだが、欲得、利益、利害、等まったく関係なし。

正業は「お花のアレンジ、樹木の手入れ」と職人という事なのだが、どうしても其の枠に収まらない。それが魅力で、それがまれなる才能という事だと思う。よーく見ると仕事のすべては壮大なオタク文化・・・一人の引きこもりの権化の作業の見本がここにある。大人となっては大人の遊び場を下仁田女性村の廃校に開設してみた。

しかし、多田欣也氏の仕事は人間というものの面白さが根底になくては出来ない事を知って欲しい。ええ、ここまでこだわるんだと思う作品に出合うたび、機械や尺度に関わり生きて行くことの小ささが見えてくるから面白い。

実はオタクは解放への入り口かもしけれないと私は思いはじめている。

500本の歴代の缶ビールたち

化石からコウモリまで

interview

多田欣也のキンヤワールド

——物書き、絵書き、ミニチュア作家、蒐集家　いわばマルチという領域に創作の幅を広げている多様で多面的で、放縦無人に活躍している多田さんを紹介するのはとても難しい

「俺もわかんない」

——一体どんな子供だったの？お生まれは岩手県遠野　民話の故郷ですよね。創作するになんか影響ありますかね

「生まれて棲んだものにはそんな意識ないでしょう。半径200メートル圏内で、近所と親戚が全世界。とにかくおばあさんだらけ、そこはちょっとおばぁちゃんたちに育てられた中で、ごちゃごちゃ何かやっていたのは関係あるかな」

——自然と老婆たちの何が力だったの？

「年寄りってね、親と違ってのんびりはしているの。何か作ったり書いたりしていても『しかたねえな、このわらすは』みたいなおっとりさ。元気でいりゃあいいみたいなね。それで見せるとうまいとかああいいなんてほめてくれる。それで嬉しくって同じ絵を何枚も書き続けるわけ。兄貴がね、俺が一年生の時、川でおぼれて死んだんだけど、成績はいいし絵はうまいし、自分はとてもかなわないと思いながらも、戦車の画なんか、横目で見ながら真似したりしていた。影響があるとすればその兄貴、死んだのは中学入ったばかりじゃなかったかな。」

——お父さんは何していらしたの？

「大体あまり男やお爺さんはいなかった。戦争に行ってしまったからかも。林檎農園していて、入り婿なの。よく話をしてくれて、今考えるとどんぐりが川に落ちて石にはじかれて、川に流されてってそんなのを話すわけ、その記憶はある。」

——土地と家族に育てられた、欣也さんと故郷遠野は子どもの時から今も変わっていない。母性回帰みたいに思える。

「愛しながら憎む　嫌いだけど好き俺はたぶん一生心の中に遠野を持ち続けると思うよ。ただ、どう考えても寒い、かなわなくても小笠原の父島に住みたいって、たげだっこみたいな夢をも練っているの今でも。」

——まあ、無理と思うけれど、本気に画家や作家になりたいと思わなかった？

「勿論思いましたよ。愛と欲望のわたしとしては。ああ、手塚治のように赤塚不二夫のようにと野望も夢もあった。中学の時、船越先生という美術の先生がいて、この先生が、商業デザインの本を貸してくれた。商業デザインという分野あって、つまりイラストレーターという新しい分野。情報が物を言う、そう思って資料のつもりで袋やマッチなんか収集していた。

また、こんなのはわらしが悦ぶべ、とせっせと持ってきてくれるばあちゃんが協力してくれた。」

——その辺りから蒐集は始まっていたのですね。

「まあ、そうはいっても反抗期はあり、常のごとく親は煩わしい、遠野は出たい煩悶はありましたがね、一人残った兄が51歳でなくなり、進学をあきらめ、人並に郷里で就職もしたし、結婚もして、子どもが三人も授かった。両親はお金のことで争ったり子どものことを考えると、やはり、これは東京に行かなくてはいけないと、その前に父島の役所に、自己紹介を書いて、受け入れてくれないかと送ったら、住むとこがないという返事が来て、あたたかいところで自分の作品を作ろうと思った。

すみっこで自作の音楽を仲間とかなです

自製手製のメンコたち

キンヤワールドに展示されている粘土細工の魚たちの作品は自信作で今度は南洋の魚を作ると意欲満々だったのに。結局現実がさきにたった、そこで花ノ企画社に就職となったのですね。植物のことも知っているし、画も書けます。」

「漫画家にはなれないと思った。俺にはストーリーを考え組み立てるのは無理、夢中で俺だけの作品を作るしかないと決心して、それは生活の全部の中に素材があるのだから、とあらゆることに挑戦しようと決めた。つまり、作品に自分なりに自信が出てきた時期、これは自分の為にする仕事と生活の為にする仕事の両立を考えた。食うためのライススタイル、自分自身の為のライフスタイル。就職したのはグリーンコージネーター、樹木や花のデザインで土を扱っていると本当に次から次にアイディアが出てくる。それから毎日スタバに行って絵をかいたり、家に帰って創作するものを考える。この習慣が今では体に刷り込まれてしまった。ずっとそうしている間に知らないうちに作品ができ、興味のママに蒐集物が溜まってきてしまった。」

——多田ワールドの展示に一千枚近くのラーメンのフタヤ何百個というビールの空き缶があり、懐かしいめんこや、ミニチュアの家やヒツジがいる。どこか、昔の子どもに返れるノスタルジックなもの、童話などが温存されている。物語は見た人がそ蹴れぞれ作ればいい、といったものを感じますよね。

「俺はね、生活のすべてが生き欲でいいと思っている。金とか、名誉とか、あまり考えた事ないけど、生きるにノルマってあるんじゃないかなあ、親父もおふくろも兄貴もみんないなくなってしまって、其の代わりに俺はいきている。まあ、今は恐いというものはないし、若いときに戻りたいとも思わない。今という時と、転がっている素材で、自分の為の世界征服・・・ちょっとオーバーだけど」

——でも、自分の時間と自分の世界を作れない人間が増えている今、機械やゲームに振りまわされない人間回帰の為にも、下仁田のきんやさんの部屋を見に来て欲しい。やっぱりキンヤワールドだわ。

聞き手：西舘好子

多田欣也 近影